

新型コロナウイルスによる価値観・死生観の変化 —秋田と東京の比較から—

小川 有閑

大正大学 地域構想研究所 研究員

(要旨) 2020 年から始まった新型コロナウイルスの感染拡大は人々の行動を制限し、生活上に外的変化を与えただけでなく、内面の価値観や死生観にも変化を生じさせた。秋田県・東京都に在住する計 40 名へのインタビュー調査から、2 地点に共通して「人間関係」、「生活の見直し」、「健康意識」、「仕事」、「死生観」に大きな影響を与えたことが分かった。一方で、秋田では感染者特定への恐怖が強く、葬儀の簡素化に対する戸惑いがあったのに対し、東京では感染者数の多さから「慣れ」の感覚があり、葬儀の簡素化もスムーズに進んだ。これらの相違は感染状況と地域風土が掛け合わさった結果と考えられる。

キーワード：新型コロナウイルス、Covid-19、価値観、死生観、葬儀

1. はじめに

2020 年から始まった新型コロナウイルスの感染拡大は人々の行動を制限し、生活上に多大な物理的影响を与えた。筆者の所属する BSR 推進センターでは、「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」を実施し、葬送儀礼の小規模化・簡素化が進展していることを明らかにしてきたが、物理的な形式の変化と死生観の変化がリンクしていることも示唆された。この知見から、新型コロナウイルスの流行は生活様式の変化を通じて私たちの価値観や死生観など内面にも深く影響を与えたのではないだろうかと関心を持つにいたった。

また、アメリカ合衆国テネシー州にあるオースティン・ピー州立大学の広野達教授より、新型コロナウイルスの感染状況が異なる国の影響の差異を調査したいとの提案があり、本研究チーム¹は主に日本国内の調査を担当し、広野氏が主にアメ

リカ国内の調査（日本でも一部調査を実施）を担当することにした²。

同じ日本国内であっても、感染状況の違いはもちろんのこと、地域社会のあり方も異なり、外的・内的影響を一律に語ることは難しい。そこで、本チームでは、秋田県と東京都の 2 つの地域の在住者にインタビュー調査を実施し、国内の多様な影響を把握することを目的とした。2 地域でそれぞれ一般 10 名、僧侶 10 名、計 40 名を対象とし、仕事、家族、人付き合いに対する考え方、死生観、宗教観などの変化について聞き取りをおこなった。

この 2 地域を選んだ理由は、秋田県と東京都の人口動態・感染状況ならびに宗教への結びつき（寺檀関係）が対照的だからである。秋田県は人口の一極集中が指摘される東京都に対して、国勢調査に基づく人口減少率が 5 回連続で全国最大という状況にある（2024 年 1 月 1 日時点で東京都人口 13,911,902 人、秋田県人口 924,620 人）。2023 年 5 月 8 日時点での感染者累計 203,791 人、死亡者

¹ 筆者と地域創生学部・高瀬顕功准教授の 2 名で調査を担当した。

² 日米の比較については広野を筆頭著者として Impact of

COVID-19 on Japanese Buddhist Communities in Japan and USA を Journal for the Scientific Study of Religion に投稿中である（2025 年 2 月 15 日現在）

数 604 人と感染状況は国内では低水準といってよい。一方、東京都は新型コロナウイルスが 5 類感染症に移行した 2023 年 5 月 8 日時点で、感染者累計 4,386,904 人、死亡者数 8,124 人と国内最多の感染状況にある。

また、秋田県は比較的寺檀関係が密であり、葬送儀礼も伝統的な方法が守られている地域である。対して東京都は葬送儀礼の簡素化・小規模化が顕著で寺檀関係も希薄と言われる地域である。

なお、新型コロナウイルスが価値観など内面に与えた影響については、学生を対象とした調査研究が散見されるものの、広く市民を対象としたものは管見では松平泉³によるもの以外は見つけられなかつた。

2. 調査概要

調査期間は 2022 年 5 月から 9 月、対象者は機縁法に基づいて選出し、zoom もしくは対面での半構造化インタビューを実施した。対象者の属性は以下の通りである。

- ①秋田県・一般：男性 4 人・女性 6 人、30 代 4 人・40 代 1 人・50 代 3 人・60 代 1 人・70 代 1 人
- ②秋田県・僧侶：男性 10 人・女性 0 人、30 代 8 人、40 代 2 人
- ③東京都・一般：男性 4 人・女性 6 人、30 代 3 人・40 代 2 人・50 代 2 人・60 代 1 人・70 代 1 人
- ④東京都・僧侶：男性 9 人・女性 1 人、30 代 1 人・40 代 4 人・50 代 5 人

なお、本調査は、大正大学研究倫理審査委員会の承認を受けている。（承認番号：22-2 号）

3. 秋田と東京の共通点

2 地域に共通して見られた変化は、「人間関係」、「生活の見直し」、「健康への意識」、「仕事への影響」、「死生観」であった。

(1) 人間関係

対面でのコミュニケーションの減少という外的変化はもちろんだが、会うべき人=大事な人というように優先順位が明確になり人間関係を整理できたというポジティブな意見が目立つた。

「『自分にとって、より大事な仕事、人は何か』ということに、すごく気が付かされた」（秋田一般・女性・70 代）

「より一層、深く人と触れ合おうとか連絡し合おうと思う人と、要らない人はもう切っていったらいいよねって。（中略）そこはある意味、もうドライになったというか。もう連絡来ないし、この人の連絡先はいいかなって、今回、ぱっぱって切った場合もありました」（秋田僧侶・男性・30 代）

「職場の人間関係ももちろんそうですけど、これは必然的に行かなくてもいい場所というか、行かなくてもいい付き合いみたいなものに行く必要がなくなったというか、断りやすくなったりというか、整理したっていう部分は一つあったと思います。反対に、いわゆる整理をした中で大事な人間関係なんだなっていうふうに思った方に対しては、コロナ禍以前よりも連絡を取る機会というのが増えた気がしています」（東京一般・男性・30 代）

「自分にとって、よりつながってみたい人が明確になったし、自分にとって関わってみたい人がはつきりしたので、それはよかったです」（東京僧侶・男性・40 代）

(2) 生活の見直し

自粛生活のなかでこれまでの家族関係を再考したり、ワークライフバランスをコロナ前に比べてプライベートに重きを置くようになったり、生活の外的変化にともない、価値観に変化が生じている様子がうかがえる。

「（自粛生活で）やっぱり一緒にいて、ぎすぎすする機会があった。そういうのって今まで外で発散して解決してたところだったと思うんですけど、

³

<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/pressimg/tohoku>

univ-
press20211125_02web_belief.pdf?utm_source=chatgpt.com

そもそもそれは家族の内側で向き合わなきやいけない問題だったのかなというふうになって。それに対して何か解決策が見つかったかというわけでもないんですけども、そういう面では、ちょっと考え方が変化したかなと思います」(秋田僧侶・男性・30代)

「例えば2018年とか2019年に比べると、今は仕事の仕方を変えていて、手を抜いてるというわけではないんですけども、10・0ではなくて、やはり5・5であったりとか、時には少し家庭のほうに重きを置くというのを、『その時々に応じて、ちょっと力配分を変えなきやいけないのかな』というのを思いました」(東京一般・男性・30代)

「コロナがなかったら得られなかった家族との時間みたいなものがもらえるから、なんかコロナに感謝する自分もいるんです」(東京一般・男性・40代)

「やっぱり何とも無駄な会議とか無駄な飲み会が多くなったんだなというのを感じますよね。今、すごい楽だなと思う。会議とかやっても、その後に懇親会がありましたけど、今は会議終わったら、すぐ帰れたり、家でZoomで済んじやうと、ものすごいやっぱ楽です」(東京僧侶・男性・40代)

(3) 健康への意識

感染対策や自粛生活による運動不足対策からの身体的な健康志向のほかに、精神的健康の低下に言及する回答も共通して見られた。

「やっぱり高齢の方との行き来が多いので、自分が下手に動いてしまうと、自身よりも他の方に迷惑を掛けるっていうのが多いので、うちにこもってしまう。やっぱりストレスっていうのはあると思います」(秋田僧侶・男性・40代)

「特に病気とかではないと思うんですけど、ずっと『ああ、コロナだしな』みたいな気持ちが何となくボワーッとあって、なんかちょっとうつうつとしがちというか、何ていうんですか、生活全体に膜がかかるみたいな感じで常にコロナがあるなって」(東京一般・女性・30代)

(4) 仕事への影響

対面を主とする職業の場合には、直接的に影響を受けており、それは僧侶も例外ではなかった。

「うちのほうでは毎日平均で5~6軒ぐらいの檀家宅を毎日回るので、私が一番かかるリスクがあるのかなというのがある。お会いするのは特に高齢者の方々なので、一応、会話はするようにはしてるんですけど、お茶とかは一切いただかないようにしたりとか」(秋田僧侶・男性・30代)

「法事が本当ないです、めちゃくちゃ。うちに駐車場がなかったら本当に倒産してんじゃないかというくらい」(東京僧侶・男性・40代)

「毎日9時5時で必ず出勤しなければ、お勤めはできないなと思っていたんですけど、ベッドからできる仕事なんて限られてしまうと思ってたんですけど、比較的、自宅からもできることがあった」(東京一般・女性・50代)

(5) 死生観

死をより身近に感じるようになったり、面会禁止のなかで死んでいくことはどういうことなのかと考えたり、死について考えるようになったという意見が見られる。僧侶も、元々持っていた死生観は搖るがないものの、死を一層リアルなものとしてとらえるようになっている。また、一般人の死生観の変化を感じたという僧侶の声もあった。

「檀家さんが大きな病気をして、コロナのために病院で手術ができず、症状が悪化してしまった。病院に入ってしまうと、会いに来てくれる人もいないですし、面会もできませんから、そういう状況になるのが、とても寂しいということで、最後は入院せずに自宅でお亡くなりになった。自分がもう長くないという時に、周りに誰もいてくれなくなる、孤独だったと思います」(秋田僧侶・男性・40代)

「コロナ患者が出た家は、ちょっと終活というか、皆さん焦っている。お墓にしろ、そういうところを整理したいという話はよく聞きます。(中略)あと、コロナだからということで家族葬も増えましたので、やっぱ世間の人が、だいぶ後悔している。

死に関して、すごい身近なものだということに一部の人は気付いてくれたのかなとは思いますよね。より仏教とか宗教に関して、興味を持つてくれる人は増えたのかなと」(秋田僧侶・男性・30代)

「死が近くなったというのは、このコロナ禍で、ちょっとと思うところはありましたね」(秋田一般・男性・30代)

「なんか死って身近にあるんだなという気はしています。あんまり知り合いが亡くなつたってことがなくて、ほんとに死んじやつても会えないことがあるのかもというようなのは突き付けられた気はします」(東京一般・女性・30代)

「身近で、都内でもお別れできないみたいなことがもう自分の目の前でリアルに起きてきてたので。さらに人はすぐ、いつ死ぬか分かんないということと、やっぱりお別れをきちんとできないということのつらさというのが何となく、よりリアルになつた」(東京僧侶・男性・40代)

4. 秋田と東京の相違点

続いて、秋田県と東京都の新型コロナウイルスによる影響の違いを見てみたい。

(1) 新型コロナウイルスへの恐怖感

(a) 秋田県

- ・初期は感染者が少なかった分、「かかつたら村八分になる」という恐怖感が強かつた。
- ・感染者が特定されるような環境があり、噂が広がることを懸念する人もいた。

「結構、最初はひどかったです。もう本当に特定されるので、個人の家も。そうすると、その家族の人たちが学校に行って、会社へ勤めてるというところまで全部、特定されて、学校にも行けなくなつて。そのお母さんがパートしているお店。お父さんは公務員なんだけど、もう、みんな辞めなきやいけなくなつた、引っ越ししたとか。それもうわざですよ。だから、それが本当か、うそか分からぬけど、全然、関係ない私たちにまで全部、うわざが広まるんです。(中略) 他県のナンバーの車、走っているじゃないですか。そうすると、

『秋田在住です』って貼つているんですよ」(秋田一般・女性・50代)

「一時期は感染者が一日 300 人、400 人いたんですけども、もうそこまで行けば『自分、かかつてもしようがないか』感は出るんですが、最近、また 50 人とか 60 人まで減つてはいるんで、そうなるとまたひと昔前みたいに、かかるのが嫌になってはきちゃいます」(秋田一般・男性40代)

「いわゆる特定ですよね。犯人探しじゃないんですけど、お参り回っていくと、最初はどこそこの誰らしいという話だったのが、次のお宅に行くと、どこの学校の生徒さんだとかって。次に出るのは、そこの親御さんがこういうことしていたから家族にうつったんだとか。しまいに、どんどん関係ない話に膨らんでいったので、いわゆる今、言われるコロナ差別ですよね。それのもう本当に始まりを目の当たりにしていたというか。これ、田舎だから故に、やっぱり話の伝わるスピードが速いでし、特定もされやすいので。そこにわれわれ和尚がお茶飲み話の中で話に全部同意しても、その差別を助長するというか、そういう危惧がありました」(秋田僧侶・男性・40代)

「かなりの最初の段階で、感染者が出た時には、もうすぐにどこどこの誰だみたいなうわざが流れて、その人の家には石投げられただの何だのみたいな。後から聞くと、そういうことはなかつたらしいんですけども、そういう誹謗中傷まがいのうわざがうわざを呼んでみたいなことはありました」(秋田僧侶・男性・30代)

「私、例えばお檀家さんのお宅に月命日にお参りに行くんですけども『東京行ってきたの?』とか『県外に行ってきたの?』と、すごい敏感な人がいるんです、いまだに。私も、その方には『ちょっと東京行ってきたから 2 週間会えませんね』みたいなことになつてしまうんです」(秋田僧侶・男性・40代)

(b) 東京都

- ・感染者数が多く、新型コロナウイルスに対する恐怖はあったが、身近に感染者がいることが当たり前になつていて。
- ・「どこにでもコロナ患者がいる」という認識が

あり、特にオミクロン株以降は「かかるのは仕方がない」という感覚も広がっていた。

「デルタ株にかかった人とオミクロン株にかかった人は、全然、そこの価値観が違うと思います。デルタ株は死に直面してると思います。僕とかは別にオミクロンだから、インフルエンザみたいなもんなんです。オミクロンも喉、2日ぐらい痛くて、頭も痛かったけど、仕事を2週間、休んで、子どもと遊んで楽しんで、全然、死に直面してないから」（東京一般・男性・40代）

「（自身も感染したが）結構、周りも感染者がちよくちよくいる。申し訳ないですけど他の方でコロナって聞くと、自分一人じゃないって思いました。

（中略）症状がこれで済むんだったら、そんなに構えなくていいかなっていうところも正直なところではあります。インフルエンザよりも熱は出ないですし、喉の痛みは強いですけど、風邪以上、インフルエンザ以下だっていう印象だったので」（東京僧侶・男性・30代）

（2）葬儀・供養に対する変化

（a）秋田県

- ・もともと葬儀をしっかりやる文化だったが、コロナ禍で急速に簡素化・小規模化が進んだ。
- ・僧侶からは「本当にこれでいいのか」という戸惑い・疑問を持つ声が多く、一般からは「これで十分」「仕方がない」という意見も見られる。

「この地域は昔から、亡くなれば町内の人たちが集まって、お通夜の時に町内の人たちが主体で集まって弔うんですけども、そういったものもなくなってきている」（秋田僧侶・男性・30代）

「やっぱり人数は制限されてきていて、自分のところは田舎なので、葬儀といえば近所の人とかも結構呼ぶ地域なんですけども、それが全くなくなって、家族とその孫ぐらいになってしまったので、今までの半分ぐらいの人数にはなっちゃったかなという感じです」（秋田僧侶・男性・30代）

「私の感覚としてはコロナ以前から、もうかなり変化はしていた。例えばご葬儀の会食であったり、いわゆる役僧をお呼びしたりとかというのが、コ

ロナ以前から、かなり減少していた。コロナが起きたことで大手を振って簡素化できたという考え方が檀家さんの様子から見て取れた。だからコロナでというよりかは、コロナが最終的な決定打ではありますね」（秋田僧侶・男性・40代）

「亡くなった父親が『家族葬でいい』とずっと言っていた、それをまず、かなえるっていう形にしたんですけど、家族としてはちゃんとしっかりと見送ってあげてもよかったですんじやないかなという葛藤とか、すごいあって。（中略）結局、葬儀とか全て終わった後に、やっぱり会いたかったと来てくれた方とかがたくさんいたんで、この形でよかったですんじやないかな？と思った」（秋田一般・30代女性）

「今は、ほんとにこじんまりと家族で送るというのが、秋田では、一番主流というか、一般的なやり方だと思います。あと、地元の新聞に訃報欄があるんですが、昔は何月何日どこどこで葬儀りますみたいのが普通でした。今はもう、『何月何日亡くなりました。葬儀は終了しました』みたいに事後報告的に載せてるのが9割9分ぐらいの感じです。そういう時代、そういう流れになってきてるのかなというのは、確かにあります」（秋田一般・男性・50代）

（b）東京都

- ・もともと「家族葬」や「火葬のみ」の形式も多かったため、大きな変化を感じる人は少ない。
- ・ただし簡素化が一層進み、通夜をやらない「一日葬」が増えた。

「前は一日葬とか言われると、いやいやって思っていたけど、コロナでその一日葬に対するハードルが自分の中で下がっちゃった。もうこういう状況だからってなると、そうですねみたいな。（中略）本当は一日葬を薦めちゃいけないというのは分かるんだけど、もうしょうがないなという。その方が、みんな安全だから、そうしましょうみたいな感じに自分もなっていっちゃったかな」（東京僧侶・40代・女性）

「昔だったら『やっぱり法事はやったほうがいいですよ』とはつきり言えたんですけど。今は『法事を行わなくとも、そんなに気にする必要はない

ですよ』というふうに。こういう状況になると、やっぱりお檀家さんの気持ちの方が優先されるので」(東京僧侶・男性・50代)

「葬儀って、もっとすごい大変な感じだったじゃない、昔は。昔というか、コロナ前は、親戚にいっぱい連絡したりいろいろあったけど、『ああいうのも、もう、しなくていいんだ』と思って。『ああいうの嫌だな』とずっと思っていても、『夫が死んだ時とか母が死んだ時、そういうの、私がやるのかな』なんて思っていたのだけど。『あ、家族葬でいいんだ』『もう簡単でいいんだ』と」(東京一般・女性・50代)

5. おわりに

40名のインタビュー調査から、秋田と東京の共通点・相違点を見てきたが、人間関係や生活の見直しなど価値観の変容が全国的にあらわれており、感染症の流行による外的変化が我々の内面にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。流行開始から2年が経っている時期での調査だったためか、最初期の混乱を脱し、落ち着いて現状を把握し、コロナ禍の影響を前向きにとらえる声が多くなったように思われる。

2 地点の相違を見てみると、感染状況と地域風

土が掛け合わさった結果として、「新型コロナウイルスへの恐怖感」「葬儀・供養に対する変化」が浮かび上がってきたと考えられる。ある種のムラ社会が強く残っている秋田では、感染者数が少ないが故に感染者が特定されやすい環境にあり、そのため住民は自身の感染に対して強い恐怖心を抱いていた。一方でそもそも人口密集で近隣の人間関係がドライな傾向にある東京では、感染者数が多く、いちいち感染者を特定する意識も弱かったのだろう。

葬儀・供養については、東京はコロナ以前から簡素化・小規模化が一般化しており、コロナ禍でも違和感は少なかった。近隣住民の多数の参列が当たり前であった秋田では、コロナ対策を口実とした簡素化・小規模化に戸惑いを覚える人も多かった。秋田の僧侶からは「20年、30年かけて生じるはずだった変化が3年で来てしまった」というような嘆きも聞かれた。

同一国内であっても、地域により、また職種によってコロナ禍の受け止めは異なる側面があり、コロナの影響を一面的に見ることは注意が必要だ。また、5類感染症に移行し、コロナ前の生活には戻ってきた現在において、本稿で分析した影響がさらにどのように変化しているのか、丁寧な追跡も必要であろう。今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 大正大学地域構想研究所 BSR 推進センター『第5回「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」結果報告書』, <https://chikouken.org/wp-content/uploads/2024/03/31ad5952b460d03a4730e7c46d5562cf.pdf>